北九州市立大学法政論集第 49 巻第 3・4 合併号（2022年 3 月）抜刷

論　　説

政治的左右と価値観の相関

――欧州社会調査と世界価値観調査の
シュワルツ価値理論設問を用いた国際比較――

中　井　　遼

北九州市立大学法政論集第49巻第３・４合併号（2022年３月）

論　　説

政治的左右と価値観の相関：欧州社会調査と世界価値観調査のシュワルツ価値理論設問を用いた国際比較

中　井　　遼*

概　要

政治的空間における「左右」の意味内容は時代・地域の政治的文脈の影響を受ける一方、人間心理とも無関係ではない事が論じられてきた。本稿は文化的制約が少ないとされる価値理論であるシュワルツ価値体系を用い、広く先進諸国を対象に、左右イデオロギー自己位置と諸価値間の相関関係を探索的に分析した。発見は主に二点である。１）平等と伝統に価値を置く態度が相対的に多くの国で左右の位置付けと相関している。２）当該両相関が見られるのは西欧・北米に多く、一部の国では伝統等の保守性（と対極にある変化への開放性）のみが左右イデオロギー自己位置と相関しており、ポスト体制変動国ではそれらの相関がない、あるいは左右の意味が逆転している例もある。

１．イントロダクション

政治的左右は様々な言葉によって彩られてきた。フランス革命に端を発するとされるこの言葉は、右がアンシャンレジームを支持する態度を意味

＊本学法学部准教授

し、左がそれに対抗する革命的態度―より敷衍して歴史的伝統から距離を取った生活様式（De Vries et al. 2013）―を意味するようになった。その意味するところは、端的に平等に対する態度だというものもあれば（Bobbio 1996）、進歩・変化と現状維持・保守と紹介するものもいるし（Weber 2000, Heywood 2018）、時に民主主義への態度を結びつける議論もあった。このほか様々に、右においては「保守」「システム維持」「秩序」「個人主義」「資本主義」「ナショナリズム」「ファシズム」「社会的統制」、左にあっては「進歩／革新」「変化」「平等」「団結」「抵抗」「運動」「反対」「急進」「社会主義」「共産主義」「広範な政治参加」などの諸概念が様々に結びつけられた（Fuchs & Klingemann 1990, Feldman 2013）。その中には「ナショナリズム」や「リベラリズム」の言葉のように、右とも左とも結びつけられてきたものも含まれる[(1)]。

第二次世界大戦後の自由民主主義を前提とする言説空間の中では、もっぱら経済と政府のかかわり方――再分配・介入と市場・競争のどちらをより重視するのか――が右と左の意味と結びつけられ[(2)]、またその程度の幅こそあれ自由な政治経済体制をステータスクオとする中で、「保守」「革新」の概念とも結び付けられてきた。世界の現実が不平等である中、「社会変革を支持するか慎重であるか」「不平等に抵抗するか甘受するか」という2点が相互に重複し、左と右の区別をつけてきた（Jost et al. 2009: 310）。

だがこれらの意味連関のつながりは、ある一定の政治経済的状況が前提とされており、また（かつて自由民主主義国が集中した）多く西欧・北米中心の諸研究に依拠してきた。そのため、その前提を共有していない政治状況にあっては政治的左右の意味は同じものにならない。例えば、左派はより平等主義的で変化に開放的だとする諸研究が多いが（Evans et al.

(1) 右翼と左翼の両極がナショナリスティックに（欧州政治の文脈では反欧州に）なる“U カーブ現象”について（Hooghe et al. 2002, Halikiopoulou et al. 2012）。

(2) 世界 42 カ国での「左右」の使われ方について、専門家サーベイを行った Huber & Inglehart 1995 によると、左右対立の意味としてもっとも参照されるのが多かったのは「経済・階級対立」であった。これが第一の対立軸として参照されなかった例外的な国はポルトガル、日本・台湾・リトアニア・ルーマニアのみであった。

1996、Feldman 1988, 2003）、共産主義政権を経て自由化 / 民主化をした国々では、平等志向は畢竟かつての体制への憧憬をも含意するから、社会変革に対する態度をもって左右を位置付ける際どちらに結びつけるかは自明ではない。日本では、「保守」「革新」のラベリングと、左右イデオロギーの意味内容は世代によって一致していない（遠藤・ジョウ 2019）。自由民主主義体制ではない中国でも、左と右の意味は逆転している（Beattie et al. 2021）。政治的左右はどこにでも存在するが、それは「不定形な器で、その意味は、根底にある政治的・経済的条件に応じて体系的に異なる」（Huber and Inglehart 1995: 91）

近年はこういった「左右」という表現の多義性や混乱性から、その利用意義が疑問視される見解があり、また近年の政治的対立をより適当に示す用法として、左右ではなく「開閉（open-closed）」を提唱する向きもある（Heywood 2019, Zollinger 2021）。他方、政治的な左右というイデオロギーが依然として第一義的に重要な政治情報であり、過去にもましてその重要性を増していると指摘され（Jost 2021: 4-7）、投票選択にあって今なお密接な関係にある（特に高学歴ほどその傾向が顕著である）事は国際的にも実証されている（Dalton & Anderson 2011, 遠藤・ジョウ 2019）。政治的情報の混乱や欠乏がある国では、政治的な「左」「右」というラベルが情報キューとなることで、その政治的競争の構造を安定させている可能性も指摘されるところである（Jou 2010）。

ただ、その際に有権者が「左右」を認識する際の価値や争点態度は均等ではない。左右の位置づけと結びつけられやすい争点態度や価値とそうではないものがあり[(3)]、またその意味内容は国や時代によって異なりうる。国や時代によって多義的で異なる意味を含められている政治的な「左」「右」という言葉に、多様な文脈を越えて共通して紐づけられるような価値意識はあるのか、あるいはどのような価値判断において国ごとに異なる紐づけがなされているのか、各国に住まう人々の自己認知に基づいて検証するこ

(3)　日本を対象としこの点を実験から明らかにした研究として秦・Song（2020）。

とが、本論の目的である。その際、近年政治学等でも利用が見られるようになってきている、シュワルツ価値理論を用いた分析を行う。既に直接にはピュルコらによって検証されている研究（Piurko et al. 2011）であり、本論はその分析対象をより拡張し、また当該論考において縮約されてしまった点について細分化して理解を深めることを目的としている。

以下、左右イデオロギー位置づけをめぐる議論を概観したのち、シュワルツ価値理論を含めて分析に用いるデータと方法を紹介したのち、分析結果を示し議論を展開する。

２．先行研究

２．１　左右イデオロギーと政策次元

左と右の意味をめぐる議論は、それがどういった意味内容を持つのかという論点だけではなく、その対立関係が 1 次元に縮約できるのか 2 次元（以上）になるのかという論点とあわせて議論されてきた。またそれは、そもそも政治的イデオロギーが、政党などの主導によりトップダウンで決まるのか人間心理に基づきボトムアップに決まるものなのかという論点とも関連している。

政治的対立を多次元でみる議論は多い。最も多く普及しているのは、経済や分配をめぐる対立を 1 次元目におき、近代と伝統、自由と秩序といった、文化・社会観をめぐる対立を 2 次元目に置く視点であろう（Kitschelt & McGann 1995, Ashton et al. 2005, Feldman & Johnston 2014）[(4)]。先述した、市場と再分配をめぐる次元と、社会変化に対する態度の捻じれの可能性に

(4)　政治イデオロギーを（経済的な）左右だけに限定せず 2 次元以上で見ようとした最初期の議論の一つに Eysenck（1957）によるものがある。そこでは経済次元と直行する時限として、Authoritarian な Toughmind と Democratic な Tendermind の対立という次元が想定された。このように、2 次元モデルはかつて経済をめぐる争点と、政治体制［民主主義か権威主義か］をめぐる争点を念頭に置かれることが多かった。経済次元で左右両極にある物が権威主義に向かい経済次元で中道にあるものが民主主義側に位置する、いわゆる蹄鉄理論もこの文脈に位置付けることができよう。

ついても、そもそもこれらが本来別の次元のものであると理解すれば、時にその位置関係が異なることは論理的帰結の一つとして当然に了解できる。

社会文化に対する政策争点の重要度はますます増していることもよく指摘される。国際化の進展にともないナショナリズムを中心とした文化的争点の重要度が増し（Hooghe & Marks 2018）、ヨーロッパでは経済的な次元以上に「リバタリアン普遍主義」vs「伝統共同体主義」次元が重要な政治争点になっている（Bornschier 2010）。対立は、市場か再分配かといった経済的争点をめぐるものだけではなく、「環境運動 / 緑 Green」「異なる価値観 Alternative」「リバタリアン Libertarian」的な志向（GAL）と、「伝統的」「権威主義的」「ナショナル」な志向（TAN）の間の対立へと政党間競争はシフトするようになった（Kitschelt & McGann 1995）[(5)]。この GAL-TAN 軸[(6)]を備えた政党データセットも現れている（Bakker et al. 2012）。また、一般有権者が自身を右と考えるか左と考えるかの自己規定に対し、その人の再分配政策上の志向と文化政策上の志向が与える影響は、時代を経るごとに後者の方が強くなっている（de Vries et al. 2013[(7)]）。

---

(5) これは同時に新しい争点を代表する新興左翼勢力との関係で既存社民政党がどういう対応を取るかといった問題でもある。それゆえ、左派政党が豊かな高学歴層による「バラモン左翼」の物になり一般労働者との関係に課題を抱える、とするピケティの議論（Piketty 2019）は、既に各所で指摘されているように（Rovny 2019, 網谷 2021）さして新しい議論ではない。

(6) もちろん、かつて政治的左右がもっぱら市場と再分配をめぐる経済政策の次元で代弁されていたことが歴史的・社会的文脈に規定されていたように、この社会次元たる GAL-TAN の意味内容も、歴史的・社会的文脈に影響を受けている。本来別々の政策争点に対する態度が束ねられているのは、それが現実の（特に西欧の）政党政治の展開から経験的に導かれたものである。一部の国・地域では、環境保護とナショナリズムの結節（いわゆるエコ・ナショナリズム）や、権威志向でありながら非ナショナリスティックな態度（Brigevich et al. 2017）など、本対立次元に縮約しきれない政治意識の関係も見られる。

２．２　左右イデオロギーの収斂と多次元性

多次元的な政策空間の中で、実際の政治的対立や政治的イデオロギー体系が一元的に集約されるのか複数次元に分散するのかについては、若干の議論がある。複数の政策争点があっても、たとえば「経済政策で保守的な者は文化政策でも保守的である」といった形で複数の争点態度が束ねられるのであれば、右の左の意味の混乱やねじれは生じないはずである。

一元的に縮約されるとする議論は、政策空間が多次元で複数の争点がある事を認めつつも、社会的・認知的・動機的理由に基づいて、より単純な次元へ縮約しようとする圧がかかると論じる (Jost et al. 2009: 315)。たしかに、政治エリートが戦略的に相互に関連しない複数の争点を戦略的に束ね、政治戦略を展開する事例は指摘されるし（cf. Hutter et al. 2018）。世論は真空な空間において生まれるのではなく、政治エリートや政治的文脈によって形成される。また、後述するように人間の心理的基盤において複数の次元でも本質的なところで根源的価値においてつながっていることが、左右の一元化を促すという見解もある。

実際に、アメリカを対象とした研究や、政治情報に通じている政治家を対象にした研究では、複数の政策空間上にあって、現実の政治的イデオロギーの位置取りが一元的に序列づけられる―すなわち、経済的に市場志向の者が社会文化的に保守的であり、経済的に再分配志向の物が社会文化的に革新的である―傾向が見られるとする（Jost et al. 2003, 2009）。比較マニフェストプロジェクト（CMP）をもとにした RILE 指標も、西欧 11 か国の政党のマニフェストをコーディングしたうえで、複数（13）の政策争点への態度から一元的に政策位置を指標化しようと試みたものである（Laver & Budge 1992）。

⑺　なお当該研究では非経済的な文化の政策次元は「伝統的生活様式」vs「個人的選択」の対立だと定義している。ただ，その実証上は移民政策に対する態度で集約させてしまっており，政策争点をより幅広くとった別の研究（Kleiner & Melcher 2020）では，人々の左右認識については経済・文化どちらの重みもはっきり時系列的に変わったとはいえない（そうである地域とそうではない地域がある）との指摘もある。

多方、多国間比較や一般世論に着目したイデオロギー研究からは、文化社会争点における態度と経済的争点における態度は基本的に独立しており、唯一の例外――アメリカ――を除いて相関していないことを示されている（Cochrane 2010: 100）。一元的に集約されるとする研究の多くはアメリカを事例としているが、そもそもそのアメリカが国際比較から見て特殊な国であるのかもしれない[(8)]。

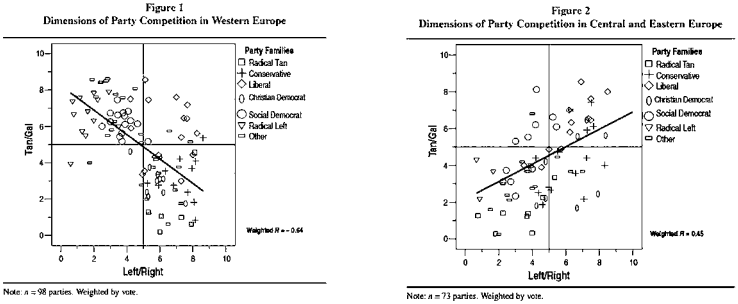
たしかに、政治家は政治情報に通じ、また戦略的利害関心をもつため複数の政治争点を一つに束ねるインセンティブを有する。しかし、政治エリートを対象にした研究で、仮に各国でそれぞれに複数争点での対立が一元的に集約しているとしても、それは同じ形で集約されていない。ヨーロッパにおける諸政党の政策空間上の位置取りを見ると、確かに諸政党が 2 次元の政策空間上でとる位置づけは斜めの一次元の線に束ねられているものの、異なる政治的文脈を経験した西欧と東欧ではその軸は完全に反転している（Marks et al. 2006）（図１）。

先述の CMP における RILE 指標に対しても、ある特定の時代・地域の政治的文脈に依拠した形で、政治的左右の一元化が行われているとの指摘から、地域の実情に合った再検討･再分析が見られるところである（渋谷･谷口 2015，谷口・ウィンクラー 2020）。

政治的イデオロギーの収斂性には左右で非対称的もある。Cochrane（2013, 2015）は、人々の政治的イデオロギー認知に影響を与えるものは 4 つの要素「平等志向・市場物質主義志向・宗教的寛容・外的グループへの寛容性」の 4 要素であるとしたうえで、左派は平等を志向するため経済や

(8) OECD 諸国で最も分極化が進展した国家であるアメリカで（Boxell et al. 2020）、政治的分極化によりイデオロギーの重要性が増しているという指摘（Abramowitz & Saunders 2008）がある。アメリカでは、より政治的に「洗練された」回答者ほど本来関係ない二つの政策次元を結び付けるレトリックに晒されるためその二つを結び付けて理解するとの指摘もある（Johnston 2011）。なお政治的洗練性（と代理変数たる学歴）観点から込み入った議論もなされているが（cf. Achterberg & Houtman 2009）、本稿ではその問題には立ち入らない。そもそも複数争点での一貫した態度が政治的洗練性を意味するかという論点については三輪（2014）を見よ。

図１：政治的文脈が異なると政党間対立の集約形態も異なる（西欧と東欧の比較）



出典：Marks et al. 2006: 159-160.
注：ここでの Left/Right は経済政策における左派右派の意味で定義づけられている。

社会文化争点で統一的な態度をとりやすい事を示す。一方、右派とされる勢力は後 3 者のうちいずれかを重視することで成立するとするため、争点によっては類似する態度を取らないことを実証している。左派は平等という論理で結節し、多様な争点で類似した態度を取りやすいのに対し、右派は異なる理由で右派であるため多様な争点では異なる立場をとる者がいることがありうる。

有権者の認知面からも、左派と自己認知するのは経済争点で再分配志向、文化争点でコスモポリタンな層だけで、そのどちらかで保守的（市場主義的もしくは文化保守的）なだけ有権者は自身を右派と認知しやすいことがわかっている（Gidron 2020、網谷 2021）。左よりも右の方が立脚する信念形態に非対称性がある、という指摘は後述の心理学的観点からもなされている（後述）。

２．３　左右イデオロギーと心理的基盤

政治的な「左」「右」が意味する内容は、その国や地域の経てきた歴史的・社会的文脈に影響を受けるが、完全に融通無碍なわけではないし、世論や社会的構造のみによって規定されるわけではない。人間が本性的に持つ心

理的特性と各人の政治的イデオロギーとの関係性を重視する研究もなされてきた。

右翼権威主義（RWA: Right Wing Authoritarian）態度や社会支配志向（SCO: Social Dominance Orientation）と、政治的性向の関連を結び付ける研究や、人間のもつ 5 つの道徳意識との結びつきに基づいて人の政治的左右との結びつきを示した研究（Graham et al. 2009, McAdams et al. 2008）などがこの分類に入る[(9)]。先述した、複数争点が一次元化されるとする議論（Jost et al. 2003, 2009）もまた、変化適応の心理的特性と不平等に対する受容性の二つが政治的左右を大きく規定する要因であると整理し、だからこそ政治イデオロギーが一元的に集約可能だと論ずる。

ただ、人の心理的特性や価値観[(10)]は一元的ではない。心理的ビッグ 5 属性と政治的イデオロギーの関係性を検討した諸研究において、心理的ビッグ 5 属性のうち開放性（Openness to experience）がもっとも政治的左右を説明する要素であるとの研究が散見され（Carney et al. 2008）、次いで誠実性（Conscientiousness）が一貫した効果を持つ（ibid, Feldman 2013: 610）。先行研究でよく指摘されているのは、開放性の高さが左派、誠実性の高さが右派とリンクするという点だが、大陸欧州での研究では開放性の高さが右派への投票を高めるという指摘もあり、その結論の含意については議論がある（Vecchione et al. 2011）。

価値観と政治的志向の関係の研究は膨大にあるが（cf. Feldman 1988, Knutsen, 1995 Kleiner & Melcher 2020）、近年増えているのはシュワルツ価値体系と様々な政治的態度の間の研究である。シュワルツ価値理論につい

---

(9)　ただしその因果については不明である。基本的には、特定の道徳意識を持つことが左右イデオロギー自己認知に先行することが想定されているものの、左右自己認知（党派性）が先に獲得されそれに整合的な規範意識を形成していく（逆の因果の）可能性も有る事は、著者ら自身が認めてもいる（Graham et al. 2009）。また、分析対象もアメリカに限定されていることは留意する必要があろう。

(10)　価値は「態度よりも抽象的で理想に焦点を当てたもの」（坂野・武藤 2012：71）である一方、規範や道徳とは異なり「こうあるべき」ではなく「こうありたい」という感覚であると整理される（同前）。

ては改めて詳述するが、そこでは10の価値観が4つの上位価値カテゴリに包含され、この4上位概念のうち「変化への開放性（Openness to Change）」と「保守性（Conservation）」が一つの軸の両極に、そしてそれと直行する軸の両極に「自己超越（Self-Transcendence）」と「自己高揚（Self-Enhancement）」が配置され、それぞれ2次元空間の極を構成している（図2）。これを用いた研究では、概ね、自己超越―自己高揚の軸での回答傾向が経済的政策次元への回答傾向と対応し、開放性―保全性の軸が社会的政策次元への態度と対応する傾向があることもわかっている（Ashton et al. 2005）[11]。枠組み創設者のシュワルツはその価値体系と政治イデオロギーの対応の可能性について、前者を経済的平等の次元、後者を国家権力とリベラリズムの次元と想定していたが（Schwartz 1994: 39-40）、それが概ね実証的に証明されたと言える。先述したコクランの研究で指摘された4要素も、ここで指摘されるシュワルツ価値体系の上位価値4要素と多少重複する面がある。

このシュワルツ価値理論を用いて政治的左右認知との関係性を国や地域の差を踏まえて検討したのが、Yuval Piurko, Shalom H. Schwartz, Eldad Davidov による2011年の *Political Psychology* 論文（Piurko et al. 2011）がある。同研究では、欧州社会調査（ESS）（第1波）を用いて左右イデオロギー自己位置とシュワルツ価値観の相関を網羅的に検証し、概ね3つのパターンの国々（リベラル型、保守型、旧共産圏型）があると論じた。福祉と自由民主主義がステータスクオであるリベラル型の国々では、平等等に代表される自己超越カテゴリの価値を重視するものが自己を左派と認識している蓋然性が高い一方、伝統などの保守性カテゴリに価値を置くものが

(11) また、自己超越 - 自己高揚の次元の回答傾向はSDO態度と、保守性 - 開放性の次元の回答傾向はRWA態度と相関することが指摘されている（Duriez & Van Hiel 2002）。これとは別にSDOは経済的対立次元と相関が強く、RWAは文化的対立次元との相関が強い事もわかっている（Duriez et al. 2005, Jost et al. 2009: 313, 三輪 2018 ）。結局のところ、経済的保守主義とSDOと自己高揚価値観はそれぞれ類似しており、文化的保守主義とRWAと（シュワルツ価値体系における）保守性もまたそれぞれ類似したものを、測定しているのかもしれない。

自己を右派と認識している蓋然性が高い。宗教の影響力が強い伝統型の国々では、自己超越カテゴリの価値の重視度と左右イデオロギー自己位置の相関がみられず、伝統などの保守性カテゴリの価値を重視するか、その対極に位置する刺激などの開放性カテゴリの価値を重視するかがが、左右イデオロギーの自己位置と大いに相関している。旧共産圏型の国々では価値観とのつながりが明確には確立されていないとする（分析対象は2002-3 年ごろのデータである）。

なお同研究では、明確に Causation の言葉を用いていないものの、価値観が政治的志向に先行しそれを説明する事を想定して議論を展開している。だが、政治的志向が先行し、自身の政治的志向に合わせるように価値観が再編成されている可能性も大いにあるから、本論でははっきりと価値観を先に置いた因果関係までは前提としない。本稿が関心を持つのは、あくまでどのような価値が各国の人々の左右イデオロギー自己位置と相関するのか、そしてその国ごとの共通性と差異を明らかにすることにある。当該先行研究（*ibid*）は、ESS 最初期の限定的なデータを用いた分析であったが、その後 ESS は調査対象国を増やしたし、また世界価値観調査（WVS）もシュワルツ価値体系の設問を含めるようになった。本研究ではより広範な国を対象にそこで得られた知見を追加検証する。

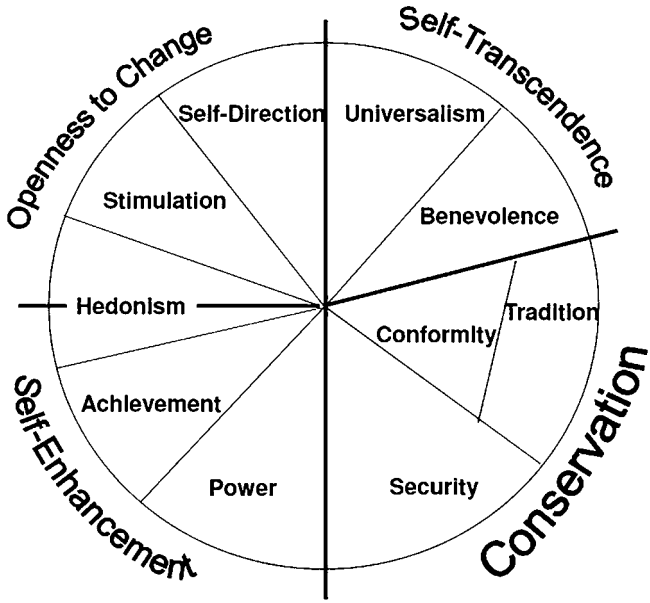
３．データと方法

３．１　シュワルツ価値理論について

本論では ESS と WVS を用いて、政治的な左右の自己位置と、諸価値観の間の関係性について検討する。なお本稿の主目的は両者の相関を見ることであり、価値観が独立変数で左右イデオロギーが従属変巣とは想定しない。

シュワルツ価値理論とその設問票である PVQ［Portrait Values Questionnaire］は、心理学で用いられるシュワルツ・バリュー・サーベイ（SVS）（Schwartz 1992）をもとにしている。本枠組みでは種々の価値が円

図 2　シュワルツによる価値体系



出典：Schwartz 2012: 9

環状に配置されており、円周上の近い位置に存在する価値観は類似し、反対側に位置していれば相反するものと表現されている。先述した通り、ここでは基礎的な 10 の価値観が 4 つの上位概念に包含され、この 4 上位概念（「（変化への）開放性」「自己高揚」「保守性」「自己超越」）が、それぞれ 2 次元空間の極を構成している（図 2）。10 の価値観は、12 時の位置からから右回りに「普遍」「善行」「伝統」「調和」「安全」「権勢」「達成」「享楽」「刺激」「自主」と並ぶ[12]。隣接する価値同士はお互いに連関し、対極に位置する価値観は対立する（あるいは無関係である）とされる。

経験的に聴取された基本的価値観に根差し「すべての文化圏の人々が認識している基本的な価値観に関係している」(Schwartz 2012, p.2）とも主張

⑿　この価値観の訳語は柏木（2009）、大塚他（2017）、谷口（2016）、山崎（2016）を参考に一部筆者が修正。

される。個別の価値の隣接構造が文化圏によっては逸脱しているとの指摘があるが（山崎 2016）、順序は一致せずともおおむね隣接する価値観同同士が近いところに現れる傾向がある（真鍋 2017）。本稿でも使用データ（より多様な地域を含む WVS データ）に基づき各価値観の相関行列を作成して国ごとのパターンを確認したが、目立って逸脱的なパターンは確認されなかった（補遺 1 参照）。

このシュワルツ価値観を図る際の質問文（PVQ）や翻訳プロセスは厳密に管理されており（真鍋 2018）、表現方法も決まっている。基本的には、「あなたが重視するか」といった直接的な方法では態度を問わず、ある価値観を重視している仮想の人物についての記述を読ませ、そこで想起される人物像に、自分がどの程度当てはまるか問う方法をとる。

本来のバージョンの PVQ は 40 項目からなる設問項目だが、欧州社会調査（ESS）用に、21 項目の短縮版である PVQ-21 が提案され（Schwartz 2003）、比較的よく用いられている。ESS の PVQ-21 が広範に用いられるようになったことに応じ（Herdin and Aschauer 2013）、WVS でも第 5 波から導入され、そこではさらに縮約した 10 設問が取り入られた（ここでは便宜的にこれを PVQ-10 と呼ぶ）。それぞれの設問項目は表 1 である。

政治学における応用例として、提唱者のシュワルツらの研究チームによる政治的価値との関係の検討（Schwartz et al. 2014）、反移民態度の規定要因研究（Davidov et al. 2008, Miglietta & Loera 2021）、社会的団結との関係（Ponizovskiy et al. 2020）、有権者セグメントと投票選択（van Herk et al. 2018, Caprara et al. 2006）、政治制度への信頼（Morselli et al. 2015）といった種々の検証に用いられるようになっている（このほか脚注 11 番の諸研究もある）。

先述したように、この諸価値観における回答傾向は、政治イデオロギーにおける経済・社会時限への回答傾向や、他の心理学的尺度ともつながっている。この諸価値に対する各回答者の重視度と、その回答者各々の左右イデオロギー自己位置の関係を見ることは、どのような価値（ひいては経済次元と社会時限の態度）がその国・地域における政治的「左右」と関連

表１　シュワルツ価値体系の各設問と ESS・WVS での利用状況

上位価値カテゴリ	価値観	設問	項目	人によって大切なことは異なります。次のような人がいるとすれば、それぞれのあり方について、あなたはどの程度当てはまりますか。	ESS (PVQ-21)	WVS (PVQ-10)
自己超越 (Self Enhancement)	普遍 (Universalism)	平等	UN1	あらゆる人々が平等に扱われ，均等に機会を持つべきと考えることが大切な人	✓	
		寛容	UN2	異なる意見を聞くこと，同意できなくても理解しようと努めることが大切な人	✓	
		環境	UN3	環境に気をつかったり資源を守ること、自然へ配慮することが大切な人	✓	✓
	慈善 (Benevolence)	利他	BE1	周囲の人を助けて，幸せにすることが大切な人 *	✓	✓
		友愛	BE2	友達に忠実であること，近しい人に貢献することが大切な人	✓	
保守性 (Conservation)	伝統 (Tradition)	穏当	TR1	控えめで穏やかであること，人から注目されないことが大切な人	✓	
		伝統	TR2	伝統や、宗教や家族によって受け継がれてきた習慣に従うことが大切な人	✓	✓
	調和 (Conformity)	従順	CO1	言われたことに従うこと，人が見ていなくてもどんな時もルールに沿うことが大切な人	✓	
		節度	CO2	常に礼儀正しくふるまうこと、間違っていると言われそうな行動を一切避けることが大切な人	✓	✓
	安全 (Security)	安心	SEC1	安全な環境に住むこと、危険なことはすべて避けることが大切な人	✓	✓
		秩序	SEC2	脅威を抑える政府や，市民を守る強い国家を求めることが大切な人	✓	
自己高揚 (Self-Transcend)	権勢 (Power)	富裕	PO1	裕福で、お金と高価な品物をたくさん持つことが大切な人	✓	✓
		権威	PO2	他人から尊敬されること，他人を従わせることが大切な人	✓	
	達成 (Achievement)	活躍	AC1	自分の能力を見せること，したことを他人に称えられることが大切な人	✓	
		成功	AC2	大いに成功すること、成し遂げたことを人に認められることが大切な人	✓	✓
開放性 (Openness to Change)	享楽 (Hedonism)	歓喜	HE1	楽しい時間をすごすこと、自分を「甘やかす」ことが大切な人	✓	✓
		娯楽	HE2	楽しい出来事を求め，楽しい事をすることが大切な人	✓	
	刺激 (Stimulation)	斬新	ST1	驚きと新しい事を求めること，沢山の異なる事をためしてみることが大切な人	✓	
		冒険	ST2	冒険し、リスクを冒すこと、刺激のある生活が大切な人	✓	✓
	自主 (Self-Direction)	創造	SD1	新しいアイデアを考えつき、創造的であること、自分のやり方で行うことが大切な人	✓	✓
		独往	SD2	自分のすることは自分で決めること，自由で他人に依存しないことが大切な人	✓	

注：設問文の日本語訳は、PVQ10 に含まれている設問は WVS 日本語質問票より、その他は筆者訳。

* WVS6 で「社会の利益のために何かするということが大切な人」が用いられている国もある。本稿の分析では使用していない。

付けられて想定されているか明らかにできる。

３．２　データの使用方法と分析手法

本稿では、各回答者が持っている各 PVQ 設問への解答態度と左右イデオロギー自己位置の間の相関を国ごとに分析・集計し、そこで得られた相関傾向が国ごとにどの程度類似しどの程度異なっているか分析する。この際、自己位置との相関があまり見られないような価値観は、そもそも政治的左右の意味内容として考慮すべき価値観としての重要性が低い事がわかる。国によって正負逆転するような価値観であれば、それは左右イデオロギー自己位置の根源的意味内容というよりは各国の文脈依存性が高いと推論できるだろう。幅広く正負どちらかの相関を示すような価値観があれば、それが左右イデオロギーの意味内容として、地域的文脈の影響を受けにくい価値観、まり、各国の様々な政治的・社会的背景や文脈依存性の少ない左右イデオロギーの意味内容と整理することができる。

データは、先述した PVQ を含んでいる国際比較世論調査の ESS と WVS を用いる。WVS は縮約された 10 設問法のみのため精度が低いものの、他方で欧州にとどまらない幅広い国々を含んでおり分析する価値がある。ESS と WVS で用いられている質問項目は表 1 の通りである。データポイントは、ESS では第 1 波から第 9 波までの統合データを用いる（概ね 2001 年から 2019 年ごろまで）。WVS では PVQ-10 設問を含んでいる第 5 波と第 6 波を用いる（概ね 2005 年から）。

分析対象は、ESS を用いる際にはデータセットに含まれるすべての国を対象とする。WVS ではより幅広い分析対象が含まれるが、本稿の対象があくまで近代諸国における政治的左右認知との結びつきであるという点にかんがみ、OECD 諸国とその加盟候補国・パートナー国とする（中国は WVS に含まれているが左右イデオロギー自己位置設問が無いため対象外とし、台湾と香港を含める）。

対象国の一覧と、その国々における左右自己位置づけの分布が表２である。いくばくかの差異はあるものの、おおむねどこの国でも中点近くに平

表２：ESS・WVS における左右イデオロギー自己位置の回答状況

	ESS (0:Left - Right:10			WVS (1:Left - Right:10)		
	N	Mean	S.E.	N	Mean	S.E.
Argentina				1519	5.55	0.05
Australia				2770	5.41	0.04
Austria (AT)	11633	4.71	0.02			
Belgium (BE)	15184	4.93	0.02			
Brazil				2558	5.39	0.05
Bulgaria (BG)	7547	5.22	0.03	712	4.77	0.08
Canada				1624	5.45	0.05
Chile				1415	5.24	0.05
Colombia				3503	6.54	0.04
Croatia (HR)	4022	5.02	0.04			
Cyprus (CY)	4062	5.11	0.05			
Czech Republic (CZ)	15650	5.34	0.02			
Denmark (DK)	11822	5.33	0.02			
Estonia (EE)	12557	5.34	0.02	1275	5.43	0.05
Finland (FI)	17157	5.64	0.02	903	5.61	0.06
France (FR)	15963	4.87	0.02	931	4.80	0.07
Germany (DE)	24023	4.60	0.01	3689	4.88	0.03
Greece (GR)	7614	5.41	0.03			
Hong Kong				2077	5.94	0.04
Hungary (HU)	12259	5.45	0.02	867	5.65	0.07
Iceland (IS)	2877	5.11	0.04			
India				4620	5.42	0.04
Indonesia				1412	6.65	0.06
Ireland (IE)	17382	5.13	0.01			
Israel (IL)	13611	6.00	0.02			
Italy (IT)	5439	5.08	0.03			
Japan				2633	5.58	0.04
Latvia (LV)	2299	5.77	0.05			
Lithuania (LT)	6960	5.04	0.03			
Luxemburg (LU)	2548	5.06	0.04			
Mexico				3200	6.22	0.05
Netherland (NL)	15953	5.26	0.02	2582	5.43	0.04
New Zealand				1240	5.70	0.06
Norway (NO)	14298	5.30	0.02	997	5.60	0.06
Peru				2165	5.61	0.05
Poland (PL)	12962	5.61	0.02	1469	5.72	0.06
Portugal (PT)	11967	4.89	0.02			
Romania				1990	5.81	0.06
Russia (RU)	8017	5.23	0.02	1473	5.48	0.06
Slovakia (SK)	8545	5.00	0.03			
Slovenia (SI)	9273	4.77	0.02	1343	5.17	0.06
South Africa				5594	6.44	0.03
South Korea				2395	5.57	0.04
Spain (ES)	14753	4.48	0.02	2081	4.69	0.04
Sweden (SE)	15234	5.20	0.02	2099	5.50	0.05
Switzerland (CH)	14330	5.03	0.02	1111	5.24	0.06
Taiwan				2340	5.35	0.04
Turkey (TR)	3531	6.06	0.05	2596	6.29	0.05
Ukraine (UA)	5913	5.46	0.03			
United Kingdom (GB)	17542	5.01	0.01	880	5.29	0.06
United States				3365	5.74	0.03
Total	362927	5.03	0.00	71428	5.65	0.01

出典：ESS1-9 と WVS5-6 より筆者作成。括弧は ESS での表記（ISO コード）

均値があり、その分散についても大きく異なるものではない（なお ESS は 11 点尺度、WVS は 10 点尺度である）。いずれの国でも十二分に左右イデオロギー自己位置について多様な意見を持つものがいる。

相関係数算出に当たっては、データセットによって提供されているウェイト調整を用い分析した。ESS は設問数が多いので有意水準算定に当たっては Bonferroni 法で補正した。結果報告時には、その結果のグルーピングを示すため、相関行列を元のデータとしたクラスター分析（ウォード法）を行う（クラスタ分析の結果は補遺に掲載）[13]。

分析結果の表中においては統計的に有意ではない（p>.05）ものについては数字を示さない[14]。表中では、正の係数を直接数字として記載し、負の係数には黒の三角（▲）を付記する。ESS・WVS 双方とも、データセットの順序都合により、正の係数が出ている部分が、その価値観を重視する回答者ほど自身を左派であると認識している傾向を表し、負の係数が出ている部分が、その価値観を重視する回答者ほど自信を右派であると認識する傾向を表す。相関係数が 0.10 以上もしくは -.010（▲ 0.10）以下の価値観は灰背景として強調する。

４．結果

４．１　左右イデオロギー自己位置と ESS データ（PVQ-21）の相関

ESS を用いたデータの分析結果を表 3 に表している。例えば、一番上の行にあるオーストリアを例にとると、同国で、自身を左派であると認識している人は、同時に平等や寛容などの普遍 UN 価値、刺激 ST や自立 SD の価値を重視し、右派であると認識している人は伝統 TR や規則への

⒀　なお統計的有意性認められなかった相関係数の部分については、正負いずれの関係も考慮できないと仮定し、0 を代入してクラスター分析を実施した。

⒁　この表記法は p 値で線引きをしてしまうという論点がありうるが、本論が主に依拠する Piurko et al. 2011 と同様の手法を取っている。表の可視性を高める効用もある。

従順さなどの調和 CO 価値を重視している（繰り返し述べるがここでは因果の向きは想定しない）。自身の成功や活躍が他人に認識されるべきかどうかという達成 AC を求める価値観については、左右イデオロギー自己位置とはっきりとした相関を持たない。

左右イデオロギー自己位置と価値観の関係について、その価値項目ごとに一定の特徴がある。①国を跨いで比較的広くその政治的自己認知に同じ方向性をもたらしている価値観、②左右イデオロギー自己位置とあまり関連していない価値観、③左右イデオロギー自己位置との関連が国によって大きく逆転している価値観と分けられよう。また特に③を媒介として、それぞれの国をいくつかのグループに分けられる。

①に当てはまるのは、平等を重視する価値観、伝統を重視する価値観、富裕さを重視する価値観などである。権威を重視する価値観にも類似の傾向があるが、それは同じ権勢 PO の下位代替といえる。②には慈善 BE 重視の価値観などが入る。③については、刺激 ST や自立 SD を重視する価値観（開放性カテゴリ）が全般的に入る。先ほど①で言及した伝統価値もこの傾向があり、その上位価値である保守性を重視する価値観と左右イデオロギー布置の関係性については、国によって効果が反転する傾向が見られる。

表れた結果は Piurko et al.（2011）が確認したものと近似する。概ね西欧諸国では、平等を中心に普遍的価値 UN を重視する者が左派である傾向があり、反対に伝統 TR、調和 CO、治安 SEC、権勢 PO を重視する者が右派であると自己認識している傾向がある。オーストリア、ドイツ、スイス、オランダ、スペイン、フランス、アイルランドといった国では、これに加えて、保守性の反対側にある、開放性の諸価値（刺激 ST、自立 SD）を重視する者が、左派的であるという傾向もある。フィンランド、ノルウェー、アイスランドなどの北欧諸国については、開放性カテゴリの重視は政治的左右と結びついておらず、スウェーデンでは新規性への開放性の重視は右派認識と相関する。とはいえこれらの国々では、平等重視を中心に普遍価値 UN が左派と結びつき、調和 CO、伝統 TR、権勢 PO が右派と結びつくという構図が存在するという構造がある。

表３：ESS シュワルツ価値理論設問（PVQ-21）と左右イデオロギー自己位置の相関

		自己超越					保守性					自己高揚					開放性				
		UN：普遍			BE：慈善		TR：伝統		CO：調和		SEC：治安	PO：権威		AC：達成		HE：快楽	ST：刺激		SD：自主	
	国	平等	寛容	環境	利他	友愛	穏当	伝統	従順	節度	安心	富裕	権威	活躍	成功	歓喜	斬新	冒険	創造	独往
リベラル型	AT	0.19	0.14	0.08	0.08	0.06	▲0.04	▲0.18	▲0.13	▲0.11	▲0.08	▲0.12	▲0.05	▲0.04		0.06	0.07	0.06	0.08	0.05
	DE	0.17	0.09	0.07	0.04	0.04	▲0.03	▲0.16	▲0.11	▲0.08	▲0.08	▲0.12	▲0.04	▲0.03			0.04	0.05	0.04	
	CH	0.21	0.10	0.12	0.04		▲0.04	▲0.21	▲0.14	▲0.10	▲0.13	▲0.16	▲0.09	▲0.08	▲0.07		0.04	0.05	0.05	
	FR	0.19	0.08	0.05				▲0.15	▲0.11	▲0.10	▲0.13	▲0.16	▲0.07	▲0.07	▲0.04	▲0.04	0.04	0.03		
	NL	0.21	0.12	0.11	0.07			▲0.14	▲0.12	▲0.09	▲0.05	▲0.13	▲0.13	▲0.06		▲0.05			0.05	0.03
	ES	0.10	0.07	0.05				▲0.21	▲0.17	▲0.12	▲0.11	▲0.13	▲0.06	▲0.08	▲0.04	▲0.05	0.03	0.04	0.04	0.06	0.04	0.05
	IE	0.07	0.03					▲0.14	▲0.11	▲0.11	▲0.06	▲0.09	▲0.03	▲0.06			0.04		0.03	0.07	0.03	
	GB	0.16	0.07		0.05			▲0.16	▲0.09	▲0.09		▲0.12	▲0.06	▲0.05								
	BE	0.15	0.08	0.04				▲0.08	▲0.06		▲0.05	▲0.08	▲0.08	▲0.03				▲0.03				
	IT	0.12	0.08	0.09			0.06	▲0.09			▲0.06	▲0.08	▲0.11									
	FI	0.15	0.05	0.06	0.04			▲0.18	▲0.12	0.10	▲0.04		▲0.11	▲0.10		▲0.08						
	DK	0.24	0.15	0.10	0.09			▲0.12	▲0.12	▲0.08	▲0.11	0.06	▲0.12	▲0.07	0.04				0.04			▲0.07
	SE	0.20	0.06	0.10	0.07			▲0.12	▲0.10	▲0.08		0.08	▲0.17	▲0.09		▲0.08	▲0.06		▲0.03	▲0.04		▲0.04
	IS	0.15		0.20				▲0.12	▲0.07	▲0.08			▲0.17									
	NO	0.19	0.07	0.16	0.04	▲0.04		▲0.08		▲0.05	▲0.04		▲0.16	▲0.05		▲0.05	▲0.04					
伝統型	LU							▲0.16	▲0.14	▲0.12												
	GR	0.07	0.04					▲0.14	▲0.11	▲0.08			▲0.07	▲0.05								0.05
	PT							▲0.10	▲0.06	▲0.05	▲0.06	▲0.04		▲0.04								
	LT								▲0.05	▲0.06		▲0.06					▲0.07	▲0.06				
	PL	0.04					▲0.04	▲0.13	▲0.04							0.04	0.06	0.06	0.03	0.06	0.04	0.05
	TR		0.07					▲0.11		▲0.07							0.07	0.10	0.08	0.10		
	SI	0.05	0.07	0.04		0.05		▲0.16	▲0.06	▲0.05		▲0.04					0.07				0.04	0.07
	IL	0.09	0.05	0.10				▲0.18				▲0.10		0.07						0.04	0.04	
	HR						▲0.08	▲0.20	▲0.07			▲0.09									0.07	
ポスト共産圏型	CY														▲0.08	▲0.06						
	UA		0.05	0.05							0.05		▲0.08		▲0.07	▲0.06	▲0.06					
	RU				▲0.05								▲0.05			▲0.07	▲0.07	▲0.06	▲0.07	▲0.04	▲0.05	
	HU							▲0.07					▲0.08				▲0.04	▲0.04	▲0.06	▲0.07	▲0.04	
	EE	0.08				▲0.05	0.08				0.04	0.05					▲0.09	▲0.04	▲0.05	▲0.06	▲0.04	▲0.05
	LV					▲0.13					▲0.08								▲0.11			
	BG	0.06					0.13	0.06	0.07	0.07	0.05	0.06	▲0.11	▲0.09	▲0.07	▲0.12	▲0.16	▲0.14	▲0.13	▲0.16	▲0.13	▲0.11
	CZ	0.06				▲0.04	0.09	0.04	0.06	0.07	0.05	0.06	▲0.16	▲0.06	▲0.11	▲0.16	▲0.16	▲0.13	▲0.16	▲0.15	▲0.15	▲0.12
	SK						0.08	0.05	0.05	0.07		0.07	▲0.10	▲0.08	▲0.08	▲0.10	▲0.10	▲0.10	▲0.10	▲0.12	▲0.12	▲0.05

出典：ESS1-9 より筆者作成。

注：p<.05 の係数のみ表示。▲は負の係数。灰背景は r>.10/r<-.10 。国名は ISO コード（表２参照の事）。

2 つ目のグループは、平等などの普遍的価値 UN と左派との自己認識のつながりが弱く、伝統 TR や調和 CO などを重視する保守性が右派認識と結びつき、その反対側である開放性の重視が左派認識と結びついている国である。Piurko ら（2011）のいう所の、伝統型パターンである。ルクセンブルク、ギリシャ、ポルトガル、リトアニア、トルコ、スロベニア、イスラエル、クロアチアがこの傾向にある。同論が主張するところでは、主に宗教を中心とした伝統的価値をめぐる争点が重要な国々である。これらの国々の一部では、豊かになることを重視する市場志向的価値観、それとつながりやすいと言われていた自己高揚カテゴリの価値観が、必ずしも右派的な自己認識と結びついていないことも特徴である（それは平等志向と左

派認識の結びつきが弱いことの裏返しでもある）。

争点が開放性（ST, SD, HE）をめぐる点にあるものの、左右の自己認識との関係が逆転している国々が、キプロス、ウクライナ、ロシア、ハンガリー、エストニア、ブルガリア、チェコ、スロバキアである。特に最後の 3 カ国では、伝統 TR、調和 CO、治安 SEC を求める保守性の高いものが、左派であると自らを認識する傾向も有している。つまり、左派が保守であり右派がリベラルである。Piurko ら（2011）の研究ではチェコ固有の現象と見られていたものであるが、本研究からはこの傾向がもう少し複数の国々で見られることがわかる。総じてこのパターンは東欧諸国に多く、それらの国々が共産主義時代を経験したことの影響が想定される。ただし、同じポスト共産主義国家であるポーランド、リトアニア、クロアチアはこのグループに入っておらず、反対に旧共産圏ではないキプロスが含まれていることから、必ずしもポスト共産主義諸国であることの普遍的・論理的帰結であるとはいいがたい。それぞれの国における固有の争点との結びつきが重要であると思慮すべきであろう（この論点は次の WVS データ分析でも現れる）。

４．２　左右イデオロギー自己位置と WVS データ（PVQ-10）の相関

WVS を用いた分析でも、概ね伝統を重視する態度 TR（と上位カテゴリの保守性）が右派と自己認識することと相関する傾向が多くの国で見られる（表 4）。反対に、変化に対する開放性を上位価値とする刺激 ST・自主 SD の価値観は、国によってそれを重視することが左派であると相関することもあれば、右派であることと相関することもある。

シュワルツ価値体系の重視項目と左右イデオロギー自己位置の相関パターンは、いくつかのグループに分けられる（ここでも Piurko et al. 2011 の枠組みを借用する）。先述の ESS データでも見られたように、欧州・北米を中心に、先進自由民主主義諸国を中心とした国々[15]は、普遍的価値 UN を重視する者が左派として自己位置づけを行い、伝統 TR を中心に保

(15)　クラスター分析上はドイツとスペインは後述するグループにカテゴライズされたが，係数分布をみてもこちらに包含する方が適当と思われる。

表４：WVS シュワルツ価値理論設問（PVQ-10）と左右イデオロギー自己位置の相関

		自己超越		保守性			自己高揚		開放性		
		普遍 UN	慈善 BE	伝統 TR	調和 CO	安全 SEC	権力 PO	達成 AC	享楽 HE	刺激 ST	自主 SD
リベラル型	Australia	0.09		▲ 0.20	▲ 0.12	▲ 0.11				0.08	0.06
	Poland			▲ 0.21	▲ 0.07	▲ 0.06				0.05	0.06
	United States	0.16		▲ 0.21	▲ 0.13	▲ 0.05					0.06
	Canada	0.12		▲ 0.22	▲ 0.11	▲ 0.13	▲ 0.10	▲ 0.06			0.07
	Argentina		0.08	▲ 0.15	▲ 0.15	▲ 0.10			▲ 0.13	0.12	0.08
	Slovenia			▲ 0.20	▲ 0.14		▲ 0.06				
	United Kingdom			▲ 0.20	▲ 0.15		▲ 0.11	▲ 0.07			
	Norway	0.10		▲ 0.14	▲ 0.13	▲ 0.09	▲ 0.17				
	New Zealand	0.24		▲ 0.08	▲ 0.15	▲ 0.12	▲ 0.12				
	Finland	0.08	0.07	▲ 0.12			▲ 0.19	▲ 0.07			
	Netherland	0.16	0.09	▲ 0.13	▲ 0.10		▲ 0.15	▲ 0.13			0.11
	Sweden	0.07		▲ 0.19	▲ 0.13		▲ 0.24	▲ 0.15	▲ 0.09		
	Switzerland	0.12	0.09	▲ 0.23	▲ 0.16	▲ 0.10	▲ 0.14	▲ 0.13			
	Germany	0.12	0.08	▲ 0.06		▲ 0.05	▲ 0.06			0.05	0.09
	Spain	0.10	0.06	▲ 0.13			▲ 0.07		0.07	0.06	0.13
伝統・非階級型	Japan			▲ 0.13	▲ 0.07	▲ 0.04	▲ 0.06			0.09	0.08
	Turkey			▲ 0.10	▲ 0.07				0.05	0.08	0.08
	South Korea			▲ 0.18	▲ 0.05	▲ 0.05		0.08	0.11	0.20	0.15
	Taiwan			▲ 0.10				0.07	0.11	0.12	0.12
	France			▲ 0.11	▲ 0.07	▲ 0.08	▲ 0.07	▲ 0.09			
	Colombia			▲ 0.10	▲ 0.07	▲ 0.06		▲ 0.10			
	Chile			▲ 0.06	▲ 0.11						
ポスト体制変動型	Indonesia	▲ 0.06		▲ 0.09	▲ 0.06			▲ 0.08			▲ 0.07
	Peru	▲ 0.05			▲ 0.07	▲ 0.06		▲ 0.04	▲ 0.05	▲ 0.06	
	Mexico			▲ 0.06		0.05			0.04	0.05	
	Hong Kong										
	Brazil			▲ 0.11	0.07	▲ 0.04					
	India	0.04	▲ 0.07				0.04	0.03	▲ 0.07		
	Estonia	▲ 0.07		▲ 0.10				▲ 0.11	▲ 0.08	▲ 0.11	▲ 0.14
	Hungary			▲ 0.08	▲ 0.07		▲ 0.11			▲ 0.12	
	South Africa	▲ 0.04					▲ 0.08	▲ 0.05	▲ 0.05	▲ 0.07	▲ 0.06
	Romania						▲ 0.05			▲ 0.07	▲ 0.06
	Russia	0.13			0.07		▲ 0.10	▲ 0.06	▲ 0.10	▲ 0.09	
	Bulgaria				0.11		▲ 0.10	▲ 0.12	0.14	▲ 0.12	

出典：WVS5-6 より筆者作成
注：p<.05 の係数のみ表示。▲は負の係数。灰背景は r>.10/r<-.10 。

守性上位価値を重視するものが右派として自己位置づけを行う傾向がある。Piurko et al. 2011 が指摘したリベラル型諸国のパターンである。オーストラリア、ポーランド、アメリカ、カナダ、アルゼンチン、オランダ、ドイツ、スペインでは、開放性（SD, ST）を重視することもまた左派であ

るとの自己位置づけと相関を持つ。カナダ、スロベニア、イギリス、ノルウェー、ニュージーランド、フィンランド、オランダ、スウェーデン、スイスでは、自己高揚（PO, AC）の価値観（それは経済的市場原理の重視と相関しやすい［Ashton et al. 2005］のは先述した通りである）を重視する者が、右派であると自己位置づけする傾向がみられる。なお、すでにポーランド、アルゼンチン、スロベニアの国名を挙げたように、これは必ずしも先進民主主義国のみに限定的なパターンではなく、後発民主主義国においてもこの傾向が見られている。

次の国々は、普遍ＵＮなどの自己超越価値が左派としての自己位置づけと相関しておらず、もっぱら伝統的価値等の保守性に対する重視が右派として自己位置づけを行う国々である。先行研究がいう所の伝統型諸国のパターンである。日本、トルコ、韓国、台湾では開放性カテゴリの価値観（SD, ST）の重視が左派であるとの自己位置づけと相関している傾向もみられる（特に台湾と韓国は享楽 HE 価値観の効果も含めてこの傾向が強い）。フランス、コロンビア、チリもこのグループに含めてよいであろう。

Piurko et al. 2011 では、このパターンが示されるのは宗教の影響力が強く伝統社会とそこからの個人の自立が主たる政治争点の国であると想定されていたが、もう少し幅広く定義すべきかもしれない。確かにトルコは世俗と宗教の対立があり、南米のコロンビア・チリもカトリック信仰の影響力は大きなものがあるが、日本、韓国、台湾、フランスについてはそうとも言い切れないところがある。特に日本については種々の先行研究において非経済的な争点が重要であるとされており、それは特に外交・安全保障をめぐる争点であった（Huber & Inglehart 1995, 田中・三村 2006）。同様の事は韓国・台湾の置かれた国際政治状況についてもいえ、その争点が長らく重要であった国にあって、経済的争点と結びつきやすい自己超越―自己高揚の諸価値観が、左右イデオロギー自己位置と結びついていないためと考えられる。重要なのは階級対立が主たる分断となっていない社会であるという事であろう。フランスについては ESS での分析結果ではリベラル型に当てはまっていたこともあり、ここでは判断を保留する。

インドネシア・ペルー・エストニア・ハンガリーは、開放性価値観が右派としての自己位置づけとつながっている一方、本来は対照的な価値とみられている保守性価値観もまた右派としての自己位置づけとつながっている。南アフリカ、ルーマニア、ロシア、ブルガリアは主に開放性価値観（SD, ST）と自己強化価値観（PO, AC）が右派としての自己認識と相関している。この傾向は ESS 分析でも見られていた。かつての政治体制が共産主義体制（＝左）から移行する中で、新たな価値観へ対応することを重視することに右翼としての自己認識が相関することは理解しやすい。しかし、旧体制が必ずしも共産主義体制ではないインドネシア、ペルー、南アフリカでも同様の傾向が出ており、体制変動を経験した諸国（あるいは世代）全般に発生する効果もありうるのかもしれない。それゆえここではポスト体制変動型と整理する。

メキシコとブラジルは、クラスター分析上これらの国々と同一に布置されているがデータの現れ方としては伝統型のパターンに含めても良いかもしれない。香港は、どの価値観の重視とも左右イデオロギーが相関していない（おそらく大陸中国との関係性のただ中で政治的左右の意味付けが困難になっている）。インドのデータの解釈は難しいが、慈善 BE が右派としての自己位置づけにつながり、自己超越（PO, AC）価値観が左派としての自己位置づけにつながっていることを考慮すると、経済次元の左右の意味が通常と逆転している可能性がある。長らく社会主義に影響をうけた経済政策がステータスクオであったことと関連しているかもしれない。

４．３　文化横断的に残る中核的特性：平等と伝統への志向

諸価値観のうち、相対的に多くの国で同方向の傾向を持っていたのは、平等を重視する価値観と左派としての自己位置づけの相関と、伝統を重視する価値観と右派としての自己位置づけの相関であった。平等重視の価値観は ESS 調査でのブルガリア、チェコ、スロバキアという反例があったものの、比較的幅広い国において自己認知を右翼と置くことと広く相関していた。変化への開放性や自主性を重視する価値観（ex、刺激 ST、自立

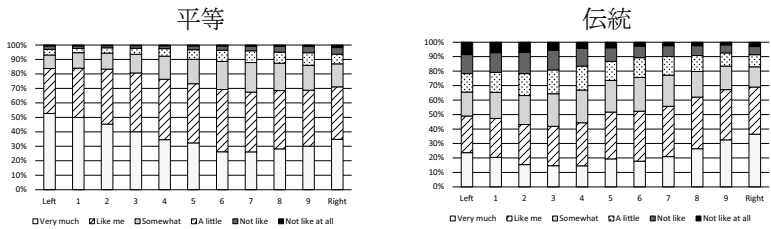
SD）の重視については、それを左と自己位置づけることが顕著な国もあれば、それを右と自己位置づけることが顕著な国もある（これは自由 / リベラルの意味付けが、左とみられるか右とみられるか国や時代によって違う事とも関連しているかもしれない）。

通常、平等を志向する者が左派であると自らを位置付ける傾向にあるという結論が得られた場合、論理的にはその逆もしかりという事になりそうである。しかし、たとえば平等を重視する価値観の保有者が自己を左と位置付ける傾向にあるからと言って、右と自らを位置付けている者が積極的に不平等を重視しているとは限らない。「右翼は朝起きて世界に不平等をもたらそうと考えているわけではない」（Cochrane 2015: 41）。

そもそも、シュワルツ価値体系に基づけば、平等のような普遍 UN 価値が含まれる自己超越の上位価値カテゴリと、伝統価値 TR が含まれる保守性の上位価値カテゴリは対極にある物ではないから、両者は相反するものではない。重要なのは価値観の優先順位の違いであるかもしれないが、これについては本分析で用いたデータを用いて直接に検証する事は出来ない。ただし、記述的状況を示すことはできる。

実際の所、左右の自己位置づけがどちらにあったとしても、多くの回答者は伝統や平等（あるいはその他の価値観）をそれなりに大切なものであると考えている（図３）。それらの価値を敢えて大切にしないとする回答

図３　平等および伝統重視の程度と左右イデオロギー自己位置



出典：ESS1-9 より筆者作成
注：解答項目は当該価値を大切にする人と自信がどの程度似ていると考えるか

者は少ない。本稿で用いたESSデータでその分布をみても、その左右イデオロギー自己位置に関わらず、7割程度以上の人が平等を大切にする人を自身に近い（Very much like me, like me）と考えている。ほとんどの人は多かれ少なかれ平等を大切にしているのである。しかし、それでもなおその比率は左派と自己位置づける人々の中により多くなっている。同じことが伝統を重視する価値観と、右派と自らを位置付ける事との間にも言える。左右イデオロギー自己位置に関わらず少なくとも5割程度以上の人々が伝統を大切にする人を自身に近いと答えている。そのわずかな価値観の差が、人々の左右イデオロギー自己位置と結びついているのであろう。

ただしこの全体的な傾向も、繰り返しになるが、その国の政治的文脈によって異なる（図は補遺3）。本稿でも用いたリベラル型・伝統型・ポスト共産主義型ごとに同様の傾向をみると、いずれのタイプのグループであっても、回答者のほとんどは平等や伝統といった価値を重視しつつも、その政治的左右イデオロギー自己位置との関係を見た時に、リベラル型では平等重視と伝統重視の双方において、伝統型では伝統重視の程度において一定の傾向が見られるが、旧共産圏型では明確な関係が見られない。旧共産圏型ではどちらかといえば、開放性に関する価値（例えば斬新さの重視）が右派としての自己位置と相関する傾向にある（補遺3）。

５．結論と含意

政治的な左右イデオロギーは、現代の民主主義社会において今なお有用な政治的なラベルとして用いられている。しかし、国（あるいは時代）によって社会を対立させる政策争点は異なり多様な次元があることから、その意味内容についてはその国の政治的コンテクストによって異なる事が想定される。政治的な「左右」自己位置は各人の意識・態度であるから、人間の心理的な性向とも無縁ではないし、それがあるべき社会像と関連する以上、各人の価値観と関係する。本稿は、人間の価値観に関して近年頻繁に用いられるようになっているシュワルツ価値体系を媒介に、どのような

価値観の重視が政治的な左右イデオロギー自己位置付けと相関するのか、国ごとに存在する共通性と差異に着目して分析した。

結論としては、本分析で対象としたような欧州諸国、先進諸国を横断して、政治的な左右イデオロギー自己位置と相関するような、唯一無二の価値観は存在しない。しかし、３あるいは４パターンの類型があり、その中では一定の類似した諸価値観と左右イデオロギー自己位置との相関関係が見られた。

平等などの普遍的価値と変化への開放性を重視する者が左派と自己位置づけを行い、富裕さなどの個人的価値と伝統等の保守性を重視する者が右派と自己位置づけを行う、リベラル型の国家群は、欧米諸国に多く見られる。これは、変化と平等さへの 2 つの態度で左右が区別されるとする見解（Jost et al. 2009: 310）と整合的である。ただし裏を返すと、それが整合的な説明を提供するのはこのパターンに当てはまる国々だけである。伝統型・非階級社会型の国々では、保守性の重視が右派としての自己位置付けと相関し、開放性を重視する者が左派と自己位置づけを行う傾向のみが顕著に見られた。これらの国では、平等と富裕の価値（シュワルツ価値体系における自己超越と自己高揚の軸）は、あまり明確に左右イデオロギーの自己位置と相関していない。近年に大きな体制変動を経たポスト体制変動 / ポスト共産主義型の国家では、概ね開放性の重視が右派としての自己位置づけと相関しており、他の事例と逆転している。反対側の保守性の重視による効果はあまり明確にみられないが、一部のポスト共産主義国家では「文化保守が左翼・文化リベラルが右翼」というように完全に逆転した政治的志向の意味連関を見せる国もある。

文化圏や国を越えて共通に人々の左右イデオロギー自己位置を規定づける価値観は存在しない、という結論は、価値観と政治的左右の関係における文脈性の重要性を再確認させる。人類共通の価値観と左右イデオロギーの関係性というものはおそらく存在しない。ただし、相対的に重要なものとして着目すべき要素が析出されたのも本分析の効用である。特に重要なのは、平等と伝統であり、これに開放性（新しいものや異質なものを受け

入れる価値観）も加わる。それらの価値観が左右イデオロギー自己位置とどう繋がるかには文脈性があるものの、それらの少数の要素との繋がりを見ることによって、ある程度まで政治的な左右空間での位置づけを推測することができる。さまざまにある価値観全てをみる必要はないのだ。

さらに検討すべき論点が二つある。１点目は、各国ごとに左右イデオロギー自己位置付けと価値観の相関が異なる（あるいは共通する）として、その相関の程度は各国内部にある社会経済的属性の影響からどの程度頑健であるかという点である。たとえば日本では、左と右の位置付けについては世代による差があまり出ない事が知られている（遠藤・ジョウ 2019）。先述の通り、高学歴層の方がイデオロギーの意味付けを整合的に理解している傾向がある事も広く知られている（Achterberg & Houtman 2009）。その国際比較から明らかになる論点もあるだろう。

2 点目は、左右イデオロギー自己位置を「わからない」と回答する者の存在に関する考慮・検討である。自身を左右空間上に位置付けられる者が多いか少ないかは国によって相当異なっており、「わからない」回答者が、2% 程度しかいないノルウェーから 22% 程度いるイタリアまで相当の開きがある（Cochrane 2011: 113）。本分析では自身の左右イデオロギーを位置付けられる回答者のみが分析対象に含まれているため、わからないとする回答者の存在も考慮した検討が必要であろう。

[参考文献]

Abramowitz, Alan I. and Kyle L. Saunders (2008) “Is Polarization a Myth?” *Journal of Politics*, 70(2): 542-555.

Achterberg, Peter and Dick Houtman (2009) “Ideologically ‘Illogical’? Why Do the Lower-Educated Dutch Display So Little Value Coherence,” *Social Forces*, 87⑶: 1649-1670.

[Amiya] 網谷龍介（2021）「「左翼政党は“エリートのための党”になった」は本当か？その問題を考えるための「様々な前提」」現代ビジネスウェブサイト、2021 年 9 月 4 日
https://gendai.ismedia.jp/articles/-/86900

Ashton, Michael C., Henry A. Danso, Gregory R. Maio, Victoria M. Esses, Michael H. Bond,

and Doris Keung (2005) “Two Dimensions of Political Attitudes and Their Individual Difference Correlates: A Cross-Cultural Perspective,” in Richard M. Sorrentino, Dov Cohen, James M. Olson, and Mark P. Zanna eds. *Cultural and Social Behavior: The Ontario Symposium Volume 10*, Routledge: 1-30.

Bakker, Ryan, Catherine de Vries, Erica Edwards, Liesbet Hooghe, Seth Jolly, Gary Marks, Jonathan Polk, Jan Rovny, Marco Steenbergen, and Milada Anna Vachudova (2012) “Measuring party positions in Europe: The Chapel Hill expert survey trend file, 1999–2010” *Party Politics*, 21(1): 143-152.

Beattie, Peter, Rong Chen, and Karim Bettache (2021) “When Left Is Right and Right Is Left: The Psychological Correlates of Political Ideology in China” *Political Psychology,* online first: https://doi.org/10.1111/pops.12776

Bobbio, Norberto (1996) *Left and Right: The Significance of a Political Distinction*, University of Chicago Press.

Bornschier, Simon (2010) “ The New Cultural Divide and the Two-Dimensional Political Space in Western Europe” *West European Politics*, 33(3): 419-444.

Boxell, Levi, Matthew Gentzkow, and Jesse M. Shapiro, 2020. “Cross-Country Trends in Affective Polarization,” NBER Working Papers 26669, National Bureau of Economic Research, Inc.

Brigevich, Anna, William B. Smith, and Ryan Bakker (2017) “Unpacking the social (GAL/TAN) dimension of party politics: Euroscepticism and party positioning on Europe’s “other,” paper prepared to 2017: EUSA Fifteenth Biennial Conference.

Carney, Dana R., Jhon T. Jost, Samuel D. Gosling, and Jeff Potter (2008) “The secret lives of liberals and conservatives: Personality profiles, interaction styles, and the things they leave behind,” *Political Psychology*, 29: 807-840.

Caprara, Gian V., Shalom Schwartz, Cristina Capanna, Michele Veccione, and Claudio Barbaranelli, (2006) “Personality and Politics: Values, Traits, and Political Choice” *Political Psychology*, 27(1): 1-28.

Cochrane, Christopher (2010) “Left/Right Asymmetries in a Multidimensional Universe: Citizens, Activists, and Parties” PhD Dissertation, University of Toronto.

Cochrane, Christopher (2013) “The Asymmetrical Structure of Left/Right Disagreement: Left-Wing Coherence and Right-Wing Fragmentation in Comparative Party Policy,” *Party Politics*, 19（1）: 104-121.

Cochrane, Christopher (2015) *Left and Right: The Small World of Political Ideas*, McGill-Queen’s University Press.

Dalton, Russell J. and Christopher Anderson (2011) *Citizens, Context, and Choice: How Context Shapes Citizens’ Electoral Choices*. Oxford University Press.

Davidov, Eldad, Bart Meuleman, Jaak Billiet, and Peter Schmidt (2011) “Values and support for immigration: A cross-country comparison” *European Sociological Review*, 24 (5): 583-599.

De Vries, Catherine, E., Armen Hakhverdian, and Bram Lancee (2013) “The Dynamics of Voters’ Left/Right Identification: The Role of Economic and Cultural Attitudes,” *Political Science Research and Method,* 1 (2): 223-238.

Duriez, Bart, and Alain Van Hiel (2002) “The march of modern fascism. A comparison of social dominance orientation and authoritarianism” *Personality and Individual Differences,* 32: 1199-1213.

Duriez, Bart, Alain Van Hiel, and Malgorzata Kossowska (2005) “ Authoritarianism and Social Dominance in Western and Eastern Europe: The Importance of the Sociopolitical Context and of Political Interest and Involvement” *Political Psychology*, 26 (2): 299-320.

[Endoh] 遠藤晶久、ウィリー・ジョウ（2019）『イデオロギーと日本政治―世代で異なる「保守」と「革新」』新泉社

Evans, Geoffrey, Anthony Heath and Mansur Lalljee (1996) “Measuring Left-Right and Libertarian-Authoritarian Values in the British Electorate,” *British Journal of Sociology*, 47 (1): 93-112.

Eysenck (1957) *Sense and Nonsense in Psychology,* Penguin.

Feldman, Stanley (1988) “Structure and Consistency in Public Opinion: The Role of Core Beliefs and Values,” *American Journal of Political Science*, 32 (2): 416-440.

Feldman, Stanley (2003) “Values, Ideology, and the Structure of Political Attitudes,” In David O. Sears, Leonie Huddy, and Robert Jervis eds. *Oxford Handbook of Political Psychology*, Oxford University Press.

Feldman, Stanley (2013) “Political Ideology,” in Leonie Huddy, David O. Sears, and Jack S. Levy eds. *The Oxford Handbook of Political Psychology (2 ed.)*, Oxford University Press. 591-626.

Feldman, Stanley and Christopher Johnston 2014 “Understanding the Determinants of Political Ideology: Implications of Structural Complexity” *Political Psychology,* 35 (3) : 337-358.

Fuchs, Dieter and Hans-Dieter Klingemann (1990) “The Lcft-Right Schema,” in M. Kent Jennings ed. *Continuities in Political Action: A Longitudinal Study of Political Orientations in Three Western Democracies*, Walter de Gruyter. 203-34.

Gidron, Noam (2020) “Many Ways to be Right: Cross-Pressured Voters in Western Europe” *British Journal of Political Science*, 52 (1) : 146-161.

Graham, Josse, Jonathan Haidt, and Brian A. Nosek (2009) “Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations,” *Journal of Personality and Social Psychology,* 96 (5): 1029–1046.

Halikiopoulou, Daphne, Kyriaki Nanou, and Sofia Vasilopoulou (2012) “The paradox of nationalism: The common denominator of radical right and radical left Euroscepticism” *European Journal of Political Research* 51 ⑷ : 504-539.

[Hata] 秦正樹, Song Jaehyun（2020）「争点を束ねれば「イデオロギー」になる？」『年報政治学』71 ⑴: 58-81.

Herdin, Thomas and Wolfgang Aschauer (2013) “Value Changes in Transforming China,” *An International Journal of Pure Communication Inquiry,* 1 ⑵: 1-22.

Heywood, Andrew (2018) *Essentials of Political Ideas*, Palgrave.

Heywood, Andrew (2019) *Politics Fifth Edition,* Red Globe Press.

Hooghe, Liesbet, Gary Marks and Carole J. Wilson (2002) ‘Does Left/Right Structure Party Positions on European Integration’, *Comparative Political Studies* 35: 965–89.

Hooghe, Liesbet and Gary Marks (2018) “Cleavage theory meets Europe’s crises: Lipset, Rokkan, and the transnational cleavage,” *Journal of European Public Policy*, 25 ⑴: 109-135.

Huber, John and Ronald Inglehart 1995 “Expert Interpretations of Party Space and Party Locations in 42 Societies,” *Party Politics*, 1 ⑴: 73-111.

Hutter, Swen, Hanspeter Kriesi and Guillem Vidal (2018) “Old versus New Politics: The Political Spaces in Southern Europe in Times of Crises,” *Party Politics,* 24 ⑴: 10-22.

Johnston, Christopher D. (2011) “The Motivated Formation of Economic Preferences” PhD Dissertation, Stony Brook University.

Jost, John T., Jack Glaser, Arie W. Kruglanski, and Frank J. Sulloway (2003) “Political Conservatism and Motivated Social Cognition,” *Psychological Bulletin*, 129 ⑶: 339-375.

Jost, John T., Christopher M. Federico, and Jaime L. Napier (2009) “Political Ideology: Its Structure, Functions, and Elective Affinities,” *Annual Review of Psychology*, 60: 307-337.

Jost, John T. (2021) *Left & Right: The Psychological Significance of a Political Distinction,* Oxford University Press.

Jou, Willy (2010) “The heuristic value of the left-right schema in East Asia,” *International Political Science Review*, 31 ⑶: 366-394.

[Kashiwagi] 柏木仁（2009）「リーダーの成長と価値観に関する定性的研究－ 価値観の止揚的融合 －」『経営行動科学』22 ⑴: 35-46.

Kitschelt, Herbert and Anthony J. McGann (1995) *The Radical Right in Western Europe: A Comparative Analysis*, University of Michigan Press.

Kleiner, Tuuli-Marja, and Reinhold Melcher (2020) “The Relation between Moral Attitudes and Political Identity,” in Niels Noergaard Kristensen ed. *Political Identity and Democratic Citizenship in Turbulent Times*, IGI Global: 203-229.

Knutsen, Oddbjorn (1995) “The Impact of Old Politics and New Politics Value Orientations on Party Choice – A Comparative Study” *Journal of Public Policy*, 15 ⑴: 1-63.

Laver, Michael J. and Ian Budge (1992) “Measuring Policy Distances and Modelling Coalition Formation” in Lave and Ian Budge eds. *Party Policy and Government Coalitions*, Palgrave Macmillan, 15-40.

[Manabe] 真鍋一史（2017）「国際比較の視座からする Schwartz の「価値観モデル」の実証的な検討――「世界価値観調査のデータ分析」――」『日本行動計量学会大会抄録集』45：210-313.

[Manabe] 真鍋一史（2018）「〈研究ノート〉Schwartz の「価値観研究」の方法論的な検討」『関西学院大学社会学部紀要』129：75-94.

Marks, Gary, Liesbet Hooghe, Moira Nelson, and Erica Edwards (2006) “Party Competition and European Integration in the East and West: Different Structure, Same Causality” *Comparative Political Studies*, 39 ⑵: 155-175.

McAdams, Dan P., Michelle Albaugh, Emily Farber, Jennifer Daniels, Regina L. Logan, and Brad Olson (2008) “Family Metaphors and Moral Intuitions: How Conservatives and Liberals Narrate Their Lives” *Journal of Personality and Social Psychology*, 95 ⑷: 978-990.

Miglietta, Anna and Barbara Loera (2021) “Modern Forms of Populism and Social Policies: Personal Values, Populist Attitudes, and Ingroup Definitions in Support of Left-Wing and Right-Wing Welfare Policies in Italy” Genealogy, 5(3): 60. https://doi.org/10.3390/genealogy5030060

[Miwa] 三輪洋文 2014「現代日本における争点態度のイデオロギー的一貫性と政治的洗練：―Converse の呪縛を超えて―」『年報政治学』65(1)：148-174.

[Miwa] 三輪洋文 2018『科学研究費助成事業　研究成果報告書　信念体系の形成過程――右翼的権威主義・社会的支配傾向・政治的社会化』

Morselli, Davide, Dario Spini and Thierry Devos (2015) “Trust in Institutions and Human Values in the European Context, A Comparison between the World Value Survey and the European Social Survey,” Psicologia Sociale, 3, 209-222.

[Otsuka] 大塚彩美、平野勇二郎、鳴海大典（2017）「省エネルギー行動の背景にある価値観・意識に関する研究」『日本建築学会環境系論文集』82(739)：811-820.

Piketty, Thomas (Arthur Goldhammer trans.) (2019) Capital and Ideology, Harvard UP.

Piurko, Yuval, Shalom H. Schwartz, and Eldad Davidov (2011) “Basic Personal Values and the Meaning of Left-Right Political Orientations in 20 Centries,” *Political Psychology,* 32 ⑷: 537-561.

Ponizovskiy, Vladimir, Regina Arant, Mandi Larsen, and Klaus Boehnke (2020). “ Sticking to common values: Neighbourhood social cohesion moderates the effect of value congruence on life satisfaction” *Community & Applied Social Psychology*, 30 ⑸ : 530-546.

Rovny, Jan (2019) “The ‘Brahmin left’ vs the ‘Merchant right’ : A comment on Thomas

Piketty's new book" LSE EUROPP Blog, September 16th, 2019. https://blogs.lse.ac.uk/europpblog/2019/09/16/the-brahmin-left-vs-the-merchant-right-a-comment-on-thomas-pikettys-new-book/#comments

[Sakano] 坂野朝子、武藤崇（2012）「「価値」の機能とは何か：実証に基づく価値研究についての展望」『真理臨床科学』2 (1): 69-80.

Schwartz, Shalom H., Gian V. Caprara, Michele Vecchione, Paul Bain, Gabriel Bianchi, Maria Giovanna Caprara, Jan Cieciuch, Hasan Kirmanoglu, Cem Baslevent, Jan-Erik Lonnqvist, Catalin Mamali, Jorge Manzi, Vassilis Pavlopoulos, Tetyana Posnova, Harald Schoen, Jo Silvester, Carmen Tabernero, Claudio Torres, Markku Verkasalo, Eva Vondráková, Christian Welzel, and Zbigniew Zaleski (2014) "Basic Personal Values Underlie and Give Coherence to Political Values: A Cross National Study in 15 Countries" *Political Behaviour*, 36: 899-930.

Schwartz, Shalom. H. (1992) "Universals in the Content and Structure of Values: Theoretical Advances and Empirical Tests in 20 Countries," *Advances in Experimental Social Psychology*, 25 (1): 1-65.

Schwartz, Shalom. H. (1994) "Are There Universal Aspect in the Structure and Contents of Human Values?" *Journal of Social Issues*, 50 (4) : 19-45.

Schwartz, S. H. (2003) "A Proposal for Measuring Value Orientations across Nations," *ESS Questionnaire Development Report.*

Schwartz, Shalom. H. (2012). An Overview of the Schwartz Theory of Basic Values. Online Readings in Psychology and Culture, 2, 1. Online: http://dx.doi.org/10.9707/2307-0919.1116

[Shibutani] 澁谷壮紀、谷口尚子（2015）「有権者のイデオロギーに関する国際比較分析」『東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報』Vol. 12、2015：37-56.

[Tanaka] 田中愛治、三村憲弘（2006）「国民意識における平等と政治：政治経済対立軸の継続と変化」『年報政治学』57 (1)：117-147.

[Taniguchi] 谷口尚子、クリス・ウィンクラー（2020）「世界の中の日本の政党位置」『年報政治学』2020-I：128-151.

[Taniguchi] 谷口葉子（2016）「有機野菜購買層の多様性とセグメンテーション：Basic Human Values を用いた類型化をもとに」『有機農業研究』8 (1)：12-25

van Herk, Hester, Pieter C. Schoonees, Patrick J. F. Groenen, and Joost van Rosmalen, (2018) "Competing for the same value segments? Insight into the volatile Dutch political landscape" *PLoS One* 13 (1): e0190598. doi: 10.1371/journal.pone.0190598

Vecchione, Michele, Harald Schoen, Jose Luis Gonzalez Castro, Jan Cieciuch, Vassilis Pavlopoulos, and Gian V. Caprara (2011) "Personality correlates of party preference: The Big Five in five big European countries," *Personality and Individual Differences*, 51(6): 737-

742.

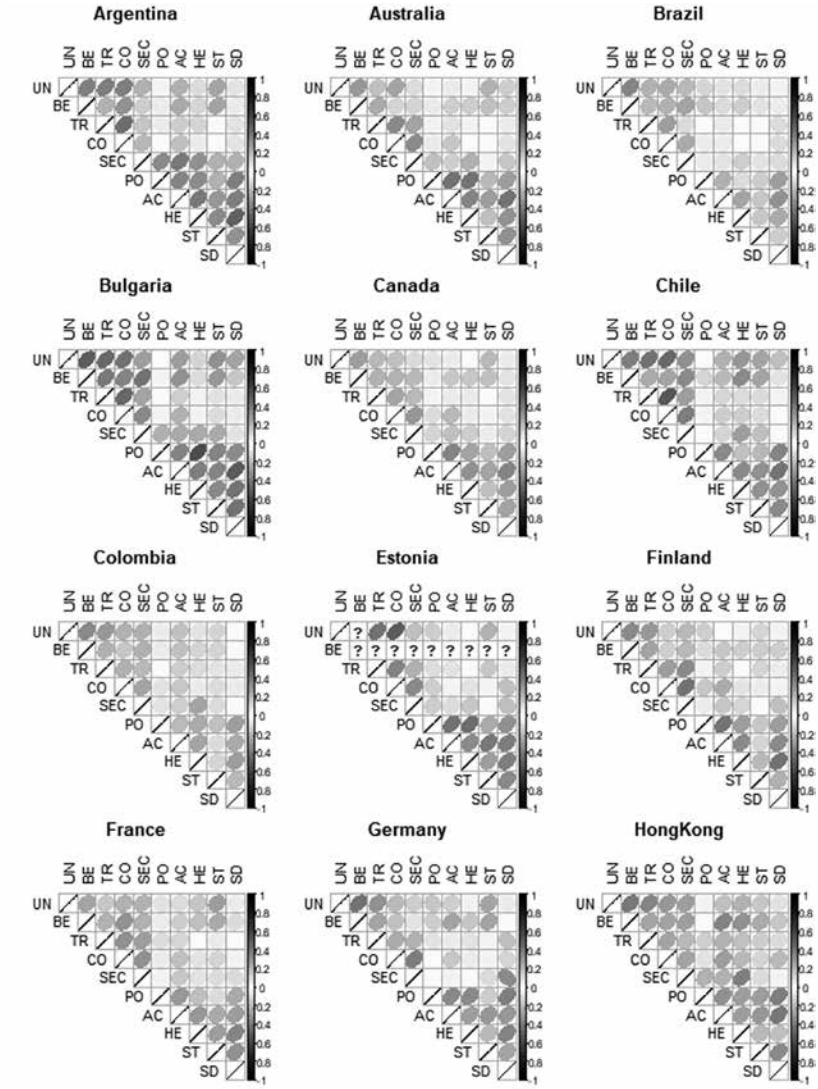
Weber, Henri (2000) *La Gauche Expliquée à Mes Filles.* Seuil.

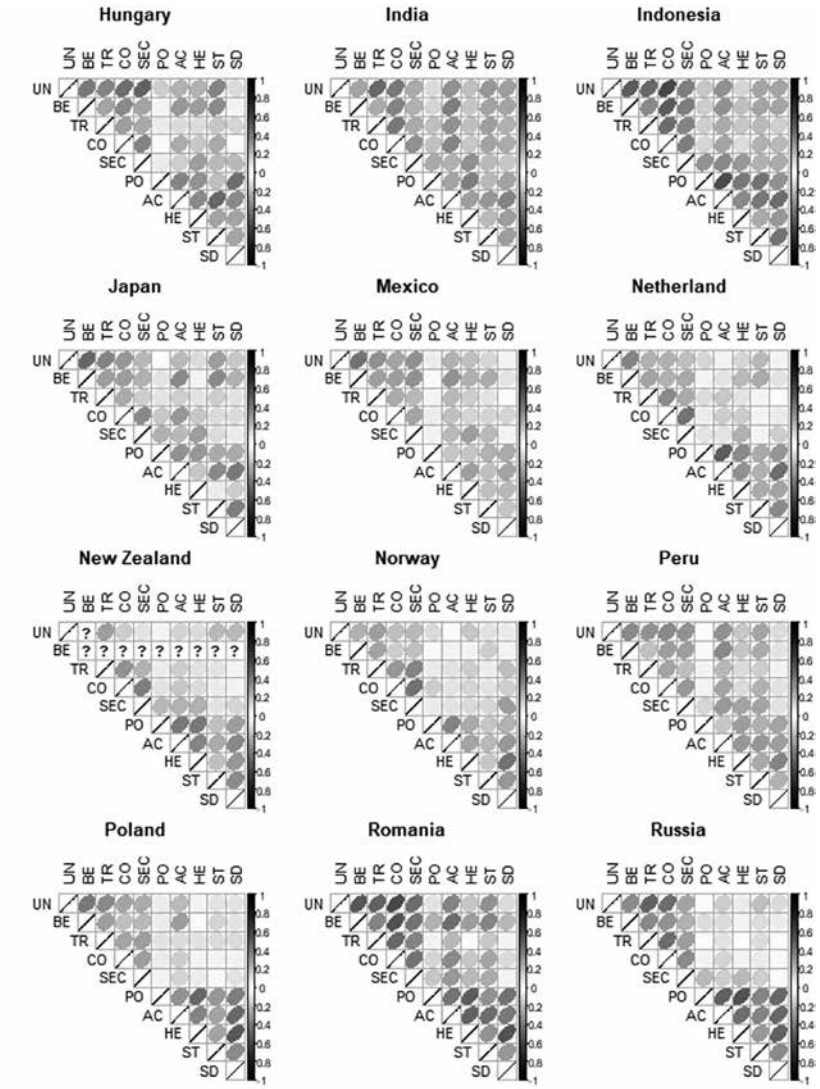
[Yamazaki] 山﨑聖子 (2016).「人生・ライフスタイルに関する意識」池田謙一編著『日本人の考え方 世界の人の考え方――世界価値観調査から見えるもの――』勁草書房.

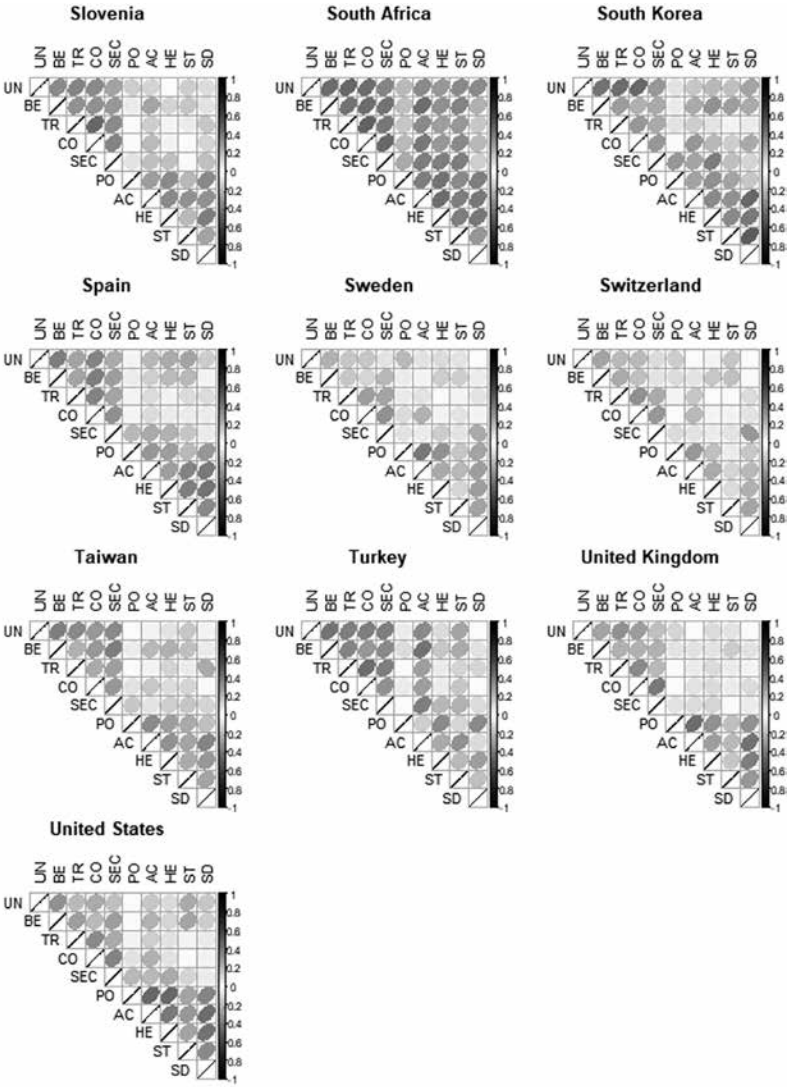
Zollinger, Delia (2021) “Voters’ notions of ‘us’ and ‘them’ may consolidate a new cleavage in Western European politics” LSE EUROPP blog, November 23rd 2021. https://blogs.lse.ac.uk/europpblog/2021/11/23/voters-notions-of-us-and-them-may-consolidate-a-new-cleavage-in-western-european-politics/]

補遺１：

シュワルツ価値理論の 10 価値観の相関行列

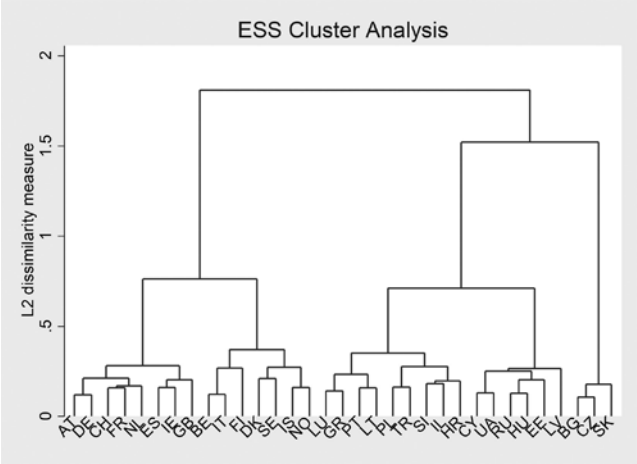


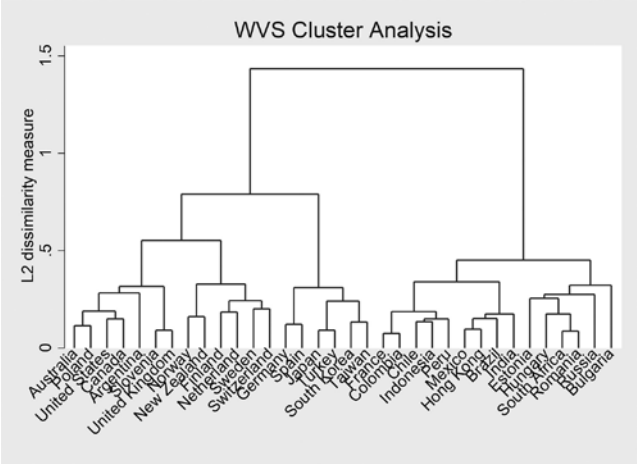

Hungary
India
Indonesia
Japan
Mexico
Netherland
New Zealand
Norway
Peru
Poland
Romania
Russia
UN BE TR CO SEC PO AC HE ST SD
1 0.8 0.6 0.4 0.2 0 -0.2 -0.4 -0.6 -0.8 -1


Slovenia
South Africa
South Korea
Spain
Sweden
Switzerland
Taiwan
Turkey
United Kingdom
United States
UN BE TR CO SEC PO AC HE ST SD
1 0.8 0.6 0.4 0.2 0 -0.2 -0.4 -0.6 -0.8 -1

補遺２：

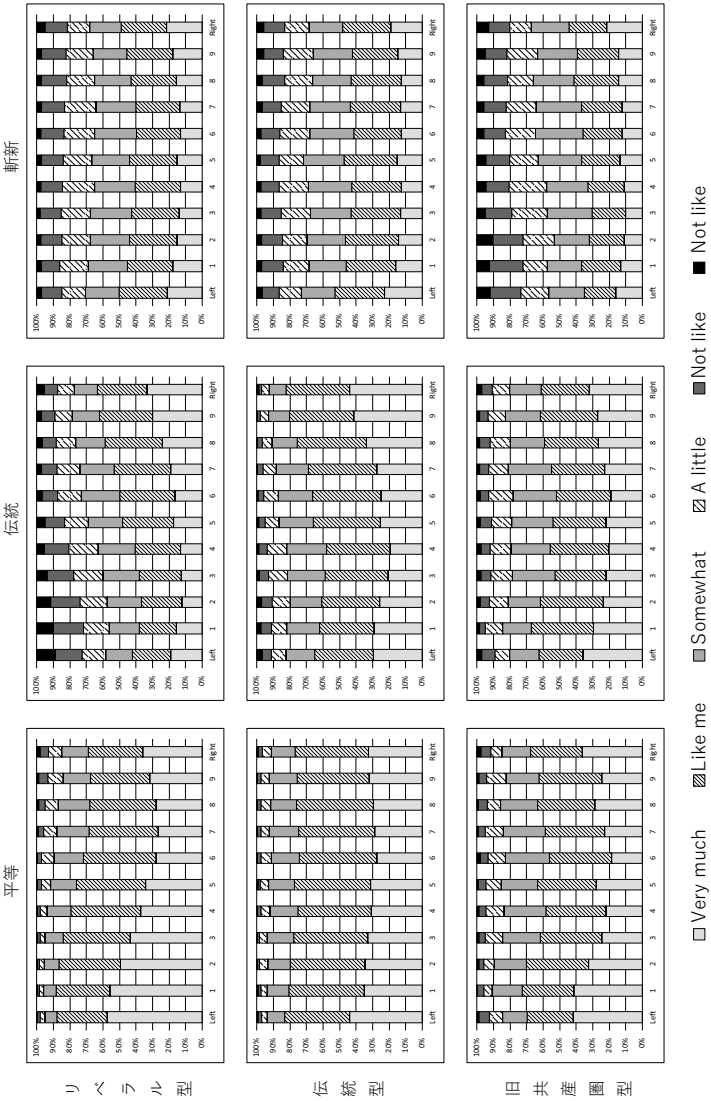
左右イデオロギー自己位置と諸価値観の相関関係を対象としたクラスター分析





注：ウォード法を利用

補遺３：タイプ別平等・伝統・斬新さ重視の程度と左右イデオロギー自己位置



Reprinted from

KITAKYUSHU SHIRITSU DAIGAKU HOU-SEI RONSHU

Journal of Law and Political Science. Vol. XLIX No. 3 / 4

March 2022

Left/Right Political Orientations and Personal Values: A Comparative Research with the Schwartz PVQ in the ESS and the WVS

NAKAI Ryo